

# お お ぞ ら

No. 166

聖隷福祉事業団への法人移管後は49号

社会福祉法人 聖隷福祉事業団  
総合病院 聖隷三方原病院  
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558  
静岡県浜松市北区三方原町3453  
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功  
編集者 横地健治

2015年2月1日

## 一般的生活活動

横地 健治

個々の重症心身障害児(者)にとつて最も良いと思われる生活をj提供するのが私たちの使命です。この問題については、たびたび本通信で取り上げています。生活経験のなかでは、達成感・満足感を持つるものが、生きがいにつながる最も尊いものだと繰り返し述べています。重症心身障害児(者)では、これを自分で選んで自分で行うことはできません。職員の濃厚な関わりが必要となります。職員がこのために取れる時間には限りがありますし、また、このために要する時間はそんなに長くは要りません。重症心身障害児(者)では、この時間以外に、食事・排泄・整容・更衣といった基本的な日常生活(ADL)、医療的ケア、リハビリなどに多くの時間を要します。それを行つても、多くの時間が残ります。こうした時間の過ごし方を、私たちの施設では「一般的生活活動」と呼んでいます。

こうした時間では、健常者は、テレビを見たり、音楽を聴いたり、軽い読み物をしたりにしています。健常者では、何をするかは自分で決めます。重症心身障害児(者)では、こうした時間の過ごし方も自分で決めて、実行するわけにはいきません。やはり、職員が何がいいかを決めて、そのように行動する必要があると思います。それでは、こうした時間の過ごし方として、何を指すのかをまず考えてみます。一番は、「こちよい」ことだと私は考えます。これは、楽しい・嬉しいといった強い感情ではありません。この強い感情は、生きがい活動にふさわしいものです。また、一般的生活活動の長い時間を通して持ち続けられる感情ではありません。重症心身障害児(者)では、その時こちよいと感じているのかどうかは、簡単にはわかりません。健常者でも、こちよいという感覚は、自覚されにくいものです。問われて初めて気づくこともあり得ます。重症心身障害児(者)では、嫌悪・不快の表出がなく、穏やかな表情を続けていれば、とりあえず、こちよいだろうと思つていいでしょう。こうした経験の積み重ねで、こちよいとい

う表出を確かに受け取れるようになっていけるだろうと思います。ところで、重症心身障害児(者)には、こちよくないことが満ちあふれていると言えます。自分で体位変換ができないので、お尻が痛くなつているかもしれない。痰がつまり、息苦しくなつているかもしれない。便が出せずに苦しんでいるかもしれない。こうした身体的なこと以外に、感覚的な問題もあり得ます。太陽の位置が変わり、強い日の光が顔にあたつているかもしれない。あるいは、暗くなつて点灯されたあたりが、鏡で反射し、顔にあたつてまぶしがっているかもしれない。音の問題は、もつと複雑です。健常者では嫌悪感をいだく音は決まっています。キーッと鳴る金属製の音がそれにあたります。重症心身障害児(者)では、どんな音がこれにあたるのか、一般的なルールはありません。ところで、脳性麻痺児の母親は、この子はこうした音が出るとパニックとなる、とよく言います。重症心身障害児(者)にも、それぞれ苦手な音はあるはずです。生活のなかで、これに気づき、できるだけこれを避

けねばならないと思います。それでは、どんな生活経験が、重症心身障害児(者)の一般的生活活動として意義があるのでしょうか。自然に興味があわくもの、思わず見入ってしまうものが、視界に入ってくることは意義があるでしょう。そのなかで、人の価値は高いと思います。ともに過ごしている入所者や職員の振る舞いは、見えるもののなかでは一番心引かれるものだと思います。静止しているものより、動きのあつた方が注意を引くでしょう。他の入所者と職員が向かい合つている活動場面は、視界に入ってくるものとしては一番価値があると思います。自分で顔の向きを変えられない重症心身障害児(者)では、それが視界になければ、見たいものと気づくこともできません。職員が見せたいと思うものが、その人の視界が入るように、その人の居場所と顔の向きを変える必要があります。重症心身障害の聞こえの世界を知るのは難しい課題です。個々の重症心身障害児(者)が、どんな音にこちよさを感じるのか、聞きたいと思うのはどんな音なのかを生活経験の中から推測することは容易ではありません(前